

「不要不急」と言うけれど (メルマガ 2021年6月号)

6月を迎えましたがコロナ禍は依然として続いており、緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が再延長され、社会生活には一定の制限が掛けられています。「不要不急」の外出の自粛要請も継続しており、今後も感染予防はしっかり取り組まなければならないと理解します。その一方でワクチン接種も進められていますので、これの効果が出てくることを願っています。重症患者数が減少し、少しでも医療従事の方々などの負担が軽減されるとよいです。

いずれにしても、感染防止対策について理解を深めるため、経済活動と両立させるためにも、科学的根拠に基づいた説明がもっとなされなければならないと感じます。

さて、よく使われる「不要不急」の言葉ですが、文化・芸術活動、スポーツ活動などについて、「不要」と「不急」の意味の異なるセットの四字熟語で一括りに制限されることには違和感を覚えます。確かに「不急」でない活動はあるかと思いますが、それでも、映画や音楽、演劇、芸術や美術の鑑賞、スポーツなどを楽しむことは、人生を豊かにするものであり、生きがいにもなっているわけで、決して「不要」なものではないはずです。

6月1日、都内の映画館では上演が再開され、映画『いのちの停車場』の出演者の舞台挨拶があったことが報じられていました。挨拶された吉永小百合さんは、「スクリーンから飛沫は飛びませんし、観客どうしが会話することも少なくなっています。何とかして映画館で見てもらいたいと思っていました。東京でもオープンしたことを嬉しく思います」と喜びを語っていました。優しい言い回しですが、もっと冷静に客観的に状況を捉えてもらいたいといった気持ちを感じました。

この間、私は国立能楽堂で狂言を鑑賞しました。感染対策を講じて公演するとのことでしたので、混雑を避けながら足を運びました。マスクの着用は言うまでもなく、入場する際には検温と消毒が行われ、チケットやチラシの手渡しは無し。観客数は座席数の半分以下で、前後左右は誰も座っていない座席配置でした。随所に消毒液が用意され、見所(観覧席)の扉は開け放たれ、換気が行われていました。「会話は極力お控えください」とのアナウンスもあり、終了後の退場も出口の混雑を防ぐため、順序の指示までありました。できる限りの対策は取られていると言えますので、ここでは不安に感じることはありませんでした。

美術館・博物館で休館のところが見られますが、開館しても、感染対策上どこに課題があるのか、どのように感染リスクを下げるかなど、詳しい説明があれば来館者の理解を得られ、「安全・安心」にもつながると思います。文化の価値がコロナ禍で下がってはなりません。

その一方で、五輪開催はあまりに規模が大きいただけに不安な気持ちが払拭されません。本来なら絆を強めるための大会が、その開催について国論が二分されることはたいへん残念なことです。政府分科会の尾身会長が、「開催すれば国内の感染や医療の状況に必ず何らかの影響を起す。感染のリスクや医療逼迫への影響について評価するのはプロフェッショナルとしての責務だ。」と国会で述べているように、精神論ではなく、「安全・安心」について科学的根拠に基づく詳しい説明を、誰もが求めていると思うのですが…。(N.W)